慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	大河内暁男著 近代イギリス経済史研究
Sub Title	
Author	寺尾, 誠
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1964
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.57, No.4 (1964. 4) ,p.357(87)- 358(88)
JaLC DOI	10.14991/001.19640401-0087
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19640401-0087

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

とのべている。（十一章）王の処刑とジロンド党の敗北、（十二章）コンドルセーへの逮捕状と地下生活、『人間精神進歩の歴史』の著述、そしてその死、（十三・四章）については革命史の一部としてよく知られているので省略する。

＊　＊　＊

さて、コンドルセーの思想の社会的性格をよみとるという最初にあげた視点から批評をこころみれば、とくに十一章でとりあげているコンドルセーとロベスピエールの対立は、単なる感情的対立ではもちろんなく、思想そのものの対立、つまり百科全書派とルソーの思想的対立であり、さらにはかれらが代表する革命的諸階層間の対立の表現であるといえよう。歴史の発展を新しい産業社会と生産力の発展とに結びつけ、人間社会の進歩に信頼したコンドルセーと、古代スパルタになぞらえた有徳の国によって近代ブルジョア社会にくつわをはめようとしたロベスピエールとの対立は、実は、フランス革命の渦中にあった諸階級、ブルジョワジーと、共同体的権利にしがみつく農民との間の対立としてみることもできるのである。

＊　＊　＊

ところで、歴史は現在と過去とのつきざる対話であるといわれるが（E・H・カー）、歴史家が現代をどうとらえているかは、かれの著作に決定的な影響を与える。

本書の著者はコンドルセーの重要な歴史的地位をみとめ、その地位を再興させようとする。フランクリンやジェファーソンがアメリカ人の父であるように、フランス共和主義者にとってコンドルセーはその父祖なのではないのか、と。だが著者が現代をただ、政治的に民主々義社会としてのみとらえ、さらにはフランス革命をただ専制から共和制へ、暗黒から光明への移行としてしかみないならば、かれはコンドルセーを無制限に理想化し、他方では逆にロベスピエールの役割を正確に評価できなくなるだろう。つまりかれは、コンドルセーとロベスピエールの対立の中に、人権の擁護者と独裁者の闘争しかみないのである。（序文）そこには歴史を理解するのに必要な経済的概念が不足しており、近代と前近代、自由と独裁というような、ごく僅かな分析用具しかないのである。

だがいうまでもなく歴史家は現代を資本主義社会として、一つの階級社会として経済学的にとらえることが必要である。そしてフランス革命を、フランス資本主義が成立するための一過程として把握することによって、はじめてコンドルセーの位置もより高い段階で明らかにされるだろう。さし当ってわれわれは本書のような研究を手がかりに進まねばならないが、ルフェーヴルらの革命史研究が、その経済的変革過程の追求に深くつきすすんでいるのをみるとき、思想史研究も、その成果をくみつくすよう努力すべきであることを痛感する。

新刊紹介

大河内暁男著

『近代イギリス経済史研究』

最近我が国西洋経済史の学界では、産業革命期の研究が盛んになりつつある。ところで産業革命を単に技術史的観点、或は経営史的観点から分析するのでは、十分ではない。そのような観点はそれ自体重要ではある。しかし産業革命そのものが一国民社会全体が、封建的再生産から資本制的再生産へと構造変革したことを意味する以上、産業革命研究も総社会的再生産構造の歴史的展開を研究の焦点としなければならない。そして国民社会全体の再生産構造の歴史的展開は、いきおい資本制的国内市場の発展と密接な関係を有するのである。ところで資本制的再生産構造といい、資本制的国内市場といい、それらは、個別分業（作業場内分業）の全面展開によってもたらされる従来の手工業的小生産の否定、この結果必然的におこる農民及び手工業者の没落、そして新たに興りつつある発展せる個別分業内部への没落農民、手工業者の包摂（労働力の商品化）等の諸過程を前提として成立する。さらにこのような資本制的関係の本源的形成そのものが、従来の農民、手工業者の小商品生産者としての成長の程度如何に左右される。このような連鎖的前提条件に基き一国の産業革命の構造的特質が決定されるのである。すなわち小商品生産者の成長が大幅に許される事情の下では、前記の諸過程は徹底して進行し、しかもそこから極めて底の深い資本制的国内市場なり、資本制的再生産過程なりが形成されてくる。逆に小商品生産者の成長が、何らかの程度で、阻止せられる事情の下では、底の浅い国内市場で再生産構造が形成されてしまう。ところで資本制的関係の本源的形成過程においては、一方で確かに個別分業（作業場内分業）の展開過程を基軸とするが、他方でこの展開過程に呼応した社会的一般的分業過程の展開過程が進行する。これこそ資本制の再生産過程の内容である。それは個別（作業場内）分業の発展に即応した社会全体の財の交換過程の確立でもある。このような財の交換過程こそ、資本制的国内市場の内容である。それは私的原理に基き、労働力の商品化を基本条件としている以上、商品生産の全般化という形で進行する。商品生産の全般化とは、全国的に自由な競争の成立を意味し、一物一価の法則が貫徹することを意味する。そして資本制的再生産過程の成立と、個別分業の発展と資本制的国内市場の形成とは、相互に相補いつつ、全社会的構造変革を完成して行く。

本書は以上簡単にのべた産業革命の理論的、構造的把握をもちつつ、世界史上初めて産業革命に突入したイギリスの一八世紀全般の経済史的分析を意図したものである。特に、資本制的再生産の基軸工業部門とされる鉄工業を中心としつつ、国内市場の形成過程と個別的分業の展開過程に最大の重点がおかれている。国内市場の形成過程については、第一章「西部ミドランズ金属工業からみた一八世紀イギリスの市場構造とその発展傾向」、第二章「道路交通からみた一八世紀前半のイギリスの国内市場」、第三章「一八世紀前半イギリス国内市場の価格組織――いわゆる『ビュウドリ相場』とその意義」、個別分業の展開過程については第四章「一八世紀バーミンガム＝ブラック・カントリ地域の金属工業の経営形態」、第五章「一八世紀前半イギリス製鉄業の経営とその企業形態」においてそれぞれ分析が行われている。この他第六章に、製鉄業保護政策の分析が追加されている。

ところで第一章では今日イギリス鉄工業の中心地であるバーミンガムが一六世紀には小市場町にすぎず、その市場圏はせいぜい半径二〇マイル程度のものであり、この内部でバーミンガムの皮革、金属工業中心に再生産圏が形成されていたことが指摘される。このいわゆる局地的市場圏は、その後一七世紀には地域的市場圏に拡大してくる。そしてロンドンの特権的製鉄業者や商人と公然と抗争するまでになる。さらに一八世紀前半にはバーミンガム地域が全国の鉄製品市場の中心になり、産業革命の前提条件が成熟してくる。第二章ではこのような全国市場の形成を道路交通の面から傍証しようとしたもので、一八世紀前にイギリスでよくきかれた悪道路の問題は、結局全国市場の成立と関係して盛んになった地方間の輸送によるのではないかとし、道路修理請願書によってこの想定を実証する。第三章ではかくして直接間接に立証された鉄製品のイギリス国内市場の形成が、価格法則に与えた影響を分析し、バーミンガム近くのセヴァーン河に面した港町ビュウドリの相場が、全国的価格の基準とされていることを確かめる。そしてビュウドリ相場の計算を分析し、利潤範疇の把握が弱いことを指摘しつつも、平均価格形成の経済史的意義を強調する。

第四章ではこのようなバーミンガム地域の個別分業の展開が、独立小生産者の上向的発展の結果として、異種の部門を夫々分業に基く協業（マニュファクチュア）として経営し、これを統合しているものや、これらの部門を相互に結合させているマニュなどがあらわれてくることが分析される。第五章では大規模製鉄所の経営者が、零細金属加工業者であることに注目し、そこから元来の製鉄業者の製鉄所賃貸制の存在をつきとめる。そしてここに零細加工業者の上昇可能性を見出す。さらに従来の鉄工業が武器等の需要にこたえて生産を行っていたのに対し、バーミンガムでは安価な日用品金具の需要にこたえて急速な成長をとげた。そして零細資本しかもたぬ経営者は共同出資者をパートナーシップの形で求めたのである。

さて最後の第六章では製鉄工業と鉄加工業の間に利害の対立がみられつつも、一八世紀前半には鉄加工業者が上昇して大製鉄業者となって行く社会的対流現象の故に、一七五〇年の鉄条令は製鉄業の保護政策が貫徹するとみる。すなわち鉄工業においては従来の鉄加工業そのものの発展ではなく、この部門から上昇した人々が製鉄業の近代化をはかることにより、新しい技術による機械製造業を展開させたのであり、これがイギリス産業革命の一方の基軸となったのである。

以上の分析は、すでにのべた理論的仮説を豊富な実証の内に検証しているものとして高く評価される。ただ著者もいうように今後の研究において国内市場の形成過程と個別分業の展開過程の相関関係が、特に労働力の商品化と関連して、究明されることを期待したい。

（岩波・A5・二二七頁・八〇〇円）

—寺尾　誠—

＊　＊　＊

岡田純一著

『経済学における人間像』

「経済学における人間像」という標題は、理論と思想、論理と主体としての人間のあり方の関係について興味をもつものにとってきわめて魅力的である。本書はこの広大な問題に対して通史的にすっかり答えてしまおうというものではなく、むしろ特殊研究らしく、重点的に探求している。

本書は三つの部分から成っている。その一は、スミス経済学における人間の問題、その二はマルクス経済学における人間の問題、その三はシスモンディ経済学研究（特に人間の問題ではない）である。

スミスにおいてはその「道徳情操論」の中に、マルクスにあっては「ドイツ・イデオロギー」の中に、それぞれの根本的な人間観・人間像が追求され、それらが「諸国民の富」「資本論」の中でいかに経済学として結実していくかが問題とされる。シスモンディについてはその「経済学新原理」と「経済学研究」がとり上げられる。

著者は序説の中で、経済学において人間の問題がとりあげられるのは二つの意味においてであるということを指摘している。その第一は方法論の問題としてであり、第二はヴィジョンとしてどんな人間像がえがかれているか、ということである。この指摘はまったく正しいが、実際にはこの二つの意味を正確に把握しながら人間像の問題を追求することはきわめて困難であって、方法論の問題は方法論一般の問題となってしまい、またヴィジョンの問題は方法論的関連ぬきのヴィジョン一般になりやすい。本書も著者の問題意識の正確さにもかかわらず、時に必ずしも「人間像」としなくてもいいのではないかと思われる部分がある。スミスについては「道徳情操論」で設定された抽象的平均人が「諸国民の富」の根底にある経済人に一致することは判るが、なぜそれが客観科学としての経済学を成立させえたかという方法論的問題は、十分説明されないように思われるし、マルクスに関しては「資本論」の中にかれの人間観をよみとろうとする著者の苦心にもかかわらず、その苦心は時に「資本の論理」そのものの叙述にひきずられ、結局、経済学のあとを人間像が空しく追いかけているようにみえる。

このような結果の根本的な理由は何かといえば、「人間像」という問題は、マックス・ウェーバーのエートスの分析におけるような広い歴史的、社会的展望に支えられる必要があるのであって、本書がスミス内在的であるがゆえに、かえって、広い思想史的視角を設定しながったからではなかろうか。さらにいえば、経済学の中に人間像の足跡を追い求めるよりは、逆に時代の人間像がいかに、またなぜ、経済学に結実するかをみる視角が必要なのではなかろうか。

その点からも本書はシスモンディのロマン派経済学者としての面だけでなく、その経済学への積極的貢献を強調したさいごの部分、フランスでのマルクス研究の紹介の部分が、むしろ著者の面目を発揮しているようである。（未来社・一九六四年一月刊・A5・二四二頁・七八〇円）

—野地　洋行—

土屋六郎著

『国際金融の構造と理論』

国際金融問題に関するテキストないし研究書が、最近相次いで出版されるようになってきている。その直接的契機をなしたのは、日本のＩＭＦ八条国への移行、ドル不足からドル危機への転換に伴うＩＭＦの改革・新しい国際通貨機構の設立をめぐる問題等であることはいう迄もない。しかしより本質的にいえば、世界経済のスムースな発展・運行のためには、実物的接近のみでなく、貨幣金融的接近が必要であり、それに応じた適切な国際金融メカニズムが確立されねばならないという理解がなされ始めたことに求められるであろう。

本書もまた、かかる要請に応じて執筆されており、序文において明確化されているように、前著の『経済成長と国際収支』での国際収支問題の実物経済的分析を、貨幣金融的分析によって補足ないし深化しようとする意図が存在している。

その性格は、研究書としてよりも、むしろ標準的な国際金融の教科書としての面が強く、実務・理論・制度・歴史を要領よくまと